



おしめ

なものも多いんです。それは日常生活の中で使われていなかったということなんです。勿体なくて使うに使えなかつたんでしょ

紺屋に特別に依頼してしつらえる嫁入り布団にも、碇打ちした木綿の藍地に、多彩な色を挿した豪華な吉祥文が隅々まで詰まった六幅のものもあれば、家紋だけを入れたもの、浅葱色のみのもなど様々な布団がある。しかし生家の経済力の差から生じる質の違いはあるにしろ、嫁ぎゆく愛娘の幸せに精一杯の祈りを籠めた親の想いは同じだ。そして孫が産まれた時に生家から贈られた藍染めのおしめには、錨の模様が染め込ま

嫁入り布団



ている。子供も産まれたのだから、そこに錨を下ろしてその家の人間になってほしいという親の励ましや願いの意味を含んでいるという。またおしめと同様に贈られた湯あげには、一角だけ朱く染められた部分があり、そこで産湯から上げた赤ちゃんの頭を拭いてやるそう。顔とお尻を一緒にの場所を拭いたら出世しないとのこと。「昔はそんな訓戒や風習がとても大切にされてきたんです。一枚一枚の模様込められた意味が感じられるのも布を収集している魅力ですね」

庶民の生活の息吹を感じる
襦袢の布団

一九九六年、水野さんは広島市内で初のコレクション展を開き、大勢の来場者が訪れ反響をよんだ。またその際、コレクションは、ひいお祖父さんが紺屋を営んでいた敷地内の山裾に湧ききれいな湧水に因んで「寶水堂コレクション」と称した。

会場には明治から昭和初期までの藍染めと襦袢の布団表を中心に展示構成した。

当時、他の物価と比較すると布類は高価であった。貧しい庶民の暮らしにおいては布は

極めて大切に扱われ、破れば当て布を繰り返し重ね繕って使うのが普通であった。その継ぎはぎだらけの布を指して襦袢と呼ぶ。

水野さんが所有するなかでも特に細かく繕われた襦袢の四幅の布団表を、一枚ずつ付箋を貼りながら端裂の枚数を数えてみたそうだ。「なんと二六八枚あったんです。まあ、この時にはびっくりしたねえ。端裂の上に端裂が完全に重なっている箇所もあるだろうから、実際にはもう少し数は増えるでしょう。これ程までに継ぎはぎをして、それだけ布を大事にしていたってことなんです」

何度も水を潜り洗練された藍の濃淡が美しい襦袢だが、なかなか手に入れることができない珍品だという。旧家を取り壊す際に出てきたとしても、先祖の貧しい暮らしぶりを恥じて人目に晒すことなく処分してしまうことが多いからだ。

「色彩豊かな華やかな嫁入り布団などあれば、こんな両極端のものもある。でも私はこの襦袢のような布に特に惹かれます。継ぎ当てられ小さな一枚の端裂からでも、当時の庶民の暮らしの息吹や心情がひしひしと伝わってくるんです。そんな暮らし振りを少しでも感じて貰えたら嬉しいと思つて」と水野さん。会期中には襦袢を前に涙ぐむ人もいたそう。襦袢は、現代における暖衣飽食の過度にまで豊かな生活を、改めて見つめ直す必要性を感じ起こさせる。

美術品や工芸品とは異なり、生活の中で愛され培われてきた布たち。次の機会は簡拙き藍染めの風呂敷や小物類の展示を中心とした展覧会を開くことを思案中とのこと、どんな布と出逢えるか楽しみだ。